

宮沢賢治の詩における四次元空間の思想をめぐって

ザベレジナヤ オリガ

本発表は、2020年にモスクワの国立研究大学「高等経済学院」東洋学部で指導を担当した「宮沢賢治の文学」というプロジェクトの一部の結果である。当プロジェクトは日本文学に関心を持つ教師、学生の共同研究計画であり、結果として研究発表や論文を目指したものである。昨年から宮沢賢治の文学を対象にしており、2019年は『銀河鉄道の夜』における色彩語を中心に研究したが、2020年はより多角的な視点をとろうとし、四次元空間の解釈をテーマにした。

四次元空間は宮沢の理想である。普段の世界に第四次元が加わることにより、様々な不思議な現象が可能になり、賢治の独特な世界が成り立っていく。科学と宗教、音楽や宇宙などが共に生きるという宮沢の複雑な世界観は四次空間を中心にしたアプローチにより把握でき、その謎の多い文学をより深く理解できるのではないかと考えられる。

第一に先行研究のあらゆるアプローチを分析し、賢治の文学における四次元空間の総合的な定義を行うとともに、「四次元空間」の同意語として扱われている単語「異空間」、「ヘテロトピア」、賢治の理想世界「イーハトーブ」との違いを明らかにする。

第二に賢治のテキストにおいて「四次元」が使われた8ヶ所を考察し、それぞれの文脈におけるその意味や四次元との関連で使われている単語（「微塵」、「軌跡」、「不完全な幻想」等）を解説する。

第三に、記されていないが、四次元的な雰囲気があると思われる詩（『青森挽歌』、『オホーツク挽歌』、『噴火湾（ノクターン）』、『無声慟哭』、『小岩井農場』等）を挙げ、その共通点として繰り返して出てくる表象（特に「透明なもの」、「電車」、「雲」）を強調する。透き通ったものは哲学者エマソンの『透明な眼球』とも関連させ、電車での移動を異空間への旅として認める可能性を考察するように、それぞれの表象と四次空間との関係性を表そうとする。